第7回学術集會會長講演

助産婦の行う性教育 Sexuality Education by Midwifery

浅 生 慶 子 (Keiko ASŌ)*

第7回日本助産学会学術集會會長

はじめに

最近性教育の必要性について、いろいろな立場の人が論じています。「性器と性交を教えなければ性教育はできない」という積極派から、「動物は、子どもに性に関することは教えないが自然に覚える」、すなわち、寝た子を起こすなという消極派までさまざまです。これらの性教育論争を見聞していると、現代日本人の性教育観は、まだまだ性器教育や純潔教育が強調されているように思います。

このような状況の中で、1992年から、文部省の学習指導要領に関する内容が変わり、小学校5年生の理科と保健の教科書に性教育が登場しました。小学校においては、性教育元年としていろいろな取り組みが始まっています。しかし、教師の中には、何をどのように教えたらよいのか戸惑いがみられます。教える側の「性教育とは何か」という意識が、年代あるいは個人によって著しく異なっている感を強くもちます。つまり、共通認識の上に立っての性教育がなされていないように思います。これは、今後の大きな課題ではないでしょうか。

それでは、助産婦はどんな性教育ができるのでしょうか。助産婦の特殊性を生かした性教育のあり方を模索しつつ進めてきました「私の考える性教育」の一端をご紹介して、その責任を果たしたいと思います。

I 助産婦の行う性教育の特徴

助産婦の行う性教育の特徴はどんなものでしょうか。私は、以下、2つのことを挙げてみたいと思います。

1つは、人がこの世に誕生したとき、最初に出会う立場から、生命誕生の場面を感動的に伝えることができること。また、胎児期から父母とのかわりをもってきた助産婦は、あなたの誕生を父や母がどんなに期待し、大切に育ててきたかをドラマチックに語ることができます。自分の誕生の話を書くときの子どもの輝いた目は、年齢や男女を問わず印象深いものです。

2つ目は、助産婦の専門性を生かした教育ができることです。助産婦教育のカリキュラムは、助産婦は人のライフサイクルにわたり、性と生殖にかかわる専門職であるとの立場を明らかにしています。その専門性を生かした展開ができます。しかも、対象は人のライフサイクル全般にわたるものです。助産婦は、時代の変化に適応した専門性を生かした性教育プログラムを構成することができます。

II 私の行っている性教育

最近、小・中・高校や老人クラブ等からの講演依頼を受け、話す機会が多くなりました。助産婦としてはたいへんうれしいことです。以下、対象別に私の実践している内容を述べてみたいと思います。

*九州大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻 (School of Medical Sciences, The University of Kyushu)

ます。

1. 小学生に対する指導内容

小学生の対象は、ほとんどの学校が5・6年生です。内容は表1に示しました。時間は40～50分で、時期は、夏休み前または、修学旅行前が最も多いようです。問題点としては、1.子どもたちの背景がわからない、2.どのような教材を使えば効果的かわからない、などがおもなものです。事前に養護教諭から知識の程度や身体の発育状況について、情報を提供していただく場合もありますが、多くは情報をもたないで行っています。市部、郡部で子どもたちは、まったく異なる反応を示すことがあります。また、学校では一度に5・6年生に学習をさせることの効率性を考えての計画と聞きますが、できれば成長の異なる5年生と6年生は分けて計画されることが望ましいと思います。

次に、教材の選定について、現在使用しているものを紹介します。助産婦学校で実習用に使用している人形を使っていますが、たいへん好評です。

実物に近い人形は、子どもたちに親近感をもたせ、講義の後で抱かせてほしいと希望する子どもたちが必ず数人はいます。首をぐらつかせ、4か月ぐらいまでは首が座らず大人は首を支え大切に抱いていることなどを話すと、一同驚きの表情を見せます。日ごろ、助産婦学生を相手にしている私にとっては、内容や言葉遣いにも自信がなく、いつも緊張していますが、40分や50分の話子どもたちは、実に感性豊かにとらえてくれます。

子どもの感想を紹介します。

- ・人形を見た感想；自分の赤ちゃんの頃はあんなに小さかったのに、僕の身長は今、154cmぐらいで約3倍ぐらいまで大きくなるのに、お母さんやお父さんが助けてくれたことにおどろき、そして、お父さんやお母さんが大変きつかったことが一時頭から離れませんでした。(小5・男子)
- ・お母さんが僕を生む時、一生懸命頑張ってこの世界に出してくれてありがとうといいたいです。今は、もんくとかいっぱい言っているのですが、あんまりもんくをいわないようにしたいです。

表1 小学校5・6年生に対する指導内容

時間：40～50分		対象：5・6年生男女
内 容	留 意 点	教 材
わたしの誕生 わたしはどうして生まれたのでしょうか 生命のもとと精子と卵子の結合	自分の誕生に感謝と誇りをもたせ、自分や生命を尊重することを強調する 妊娠・出産時の父母の喜びや感動はドラマチックに話す	ベビー模型 男の子、女の子 ビデオ 「弟たちの誕生」
男の子と女の子の成長の違い 男女の体は発育に伴って変化し、男女の特徴がはっきりしてくる	性差を理解させる それぞれの第二性徴について知り、お互いに思いやる気持ちをもつこと。 相手の嫌がることをしないことを強調	
成長の個人差 この時期は、個人によって違いがあること		
危険な誘惑 性被害が起こるわけを話し、性被害から自分を守ることを	子どもの性被害が多いことから、性被害にあわないように	
これから成長していくために 身体の清潔、友達を大切に、自分を大切に、男女が協力し合う	身体の清潔 入浴のマナー 下着の取り換え	

内容は、時間によって多少変更します。

あんなに小さかった僕がこんなに大きくなったのは、お母さんたちのおかげだと思った。だから、この大切な体をわるくならないようにタバコやシンナーをすわない。家のおへその緒をみると、お母さんと僕の体は栄養でつながっていたんだなぁと思った。お母さんにもらったこの命を大切にしようと思った。(小5・男子)

- ・小学校からダイエットをしようといけなかった話をききました。ダイエットをしようと思っていただけやめました。〇〇先生の教えてくれないことも教えてもらって勉強になりました。(小6・女子)
- ・私、成長が早いからみんなとちがうといつも思っていた。先生の話聞いてちょっと安心した。みんな個人差があるから、気にしないで自分の体を守ろう。赤ちゃんを産んだ時の喜びは産んだことのある人でないとわからないと先生が言ったが、でもなんとなくわかるような気がする。お母さんは、私が生まれるまで害のあるものをさけて、大切に育ててくれたんだなぁ。家に帰っててれくさかったけど、「私を生んでくれてありがとう」と一言つぶやいた。(小6・女子)
- ・11月21日、〇〇先生という赤ちゃんを生ませる先生が学校にきました。そして、10時から40分間話をしてくれました。先生は楽しく面白い先生でした。先生の話を書いていると、全然退屈じゃありませんでした。そして、赤ちゃんの話をいろいろ話してくれました。先生が連れてきた太郎ちゃんを使って話してくれました。赤ちゃんは生まれたばかりの体重は、3000グラム、身長は50cm位だそうです。それから赤ちゃんはお母さんのおなかの中でどんなふうにいるとか話してくれました。生まれたばかりの赤ちゃんは首がぐらぐらしているということは、ぜんぜん知りませんでした。それと、小さい時シンナーやたばこを吸ったりしたら、生んだ赤ちゃんが小さいということをはじめて知りました。先生の話はとても勉強になりました。(小5・女子)

2. 中学生に対する指導内容

中学生は、思春期のスパートと呼ばれるような発育速度の増加がみられる時期です。このように、性的な機能が発達し、肉体的な面で生殖能力が具

備されるとともに、人間関係が多様化する時期でもあります。そして、異性に対する関心も高まってきます。また、社会面では、高校入試の重圧に大きなストレスをもちつつ学校生活を過ごしています。中学校では、高校入試の合格率に頭を痛めているほど、生徒たち個々の発達課題達成に向けてのかかわりがもたれているだろうかと疑問に思います。

数少ない体験からこのようなことを申し上げるのはおしかりを受けるかもしれませんが、女子中学生の妊娠の実態や相談内容などからみて、中学校における性教育のあり方に疑問をもたざるをえません。某中学校の教師は、「中学時代は進学のことと性教育どころではない」と話していました。今坂は、中学教師の91%は性教育が必要であるとし、必要でないとするものは7%であったと報告しています。

文部省は、「生徒指導における性に関する指導、中学校・高等学校編」で次のように述べています。「学校は全ての生徒に対して人間の性に関する基礎的・基本的事項を正しく理解させ、自己の性に対する認識をより確かにさせるとともに人間尊重、男女平等の精神に基づき、男女の人間関係や現在及び将来の生活における性に関する諸問題に対して、適切な意思決定や行動の選択ができるように性に関する指導を充実することが必要です」。

このように、立派な精神を基盤とした指導要領があり、教師の90%以上が必要性を感じているにもかかわらず、性教育の時間がとれないというのが現実の中学校の姿かもしれません。性教育は当然のことながら人間教育であり、性教育としての時間をとらなくても、いろいろな科目の中で展開できるでしょう。しかし、現実には自分のからだの変化に悩み、戸惑い、異性への関心に対する不安や罪悪感をもつ生徒たちの問題をどう解決すればいいのでしょうか。精神的に未熟な中学生の発達課題をいまこの時期に解決していかなければ、次のステップに進めないのではないかと思います。

次に、中学生に性交を教えるべきか否かという論議は、いずれの場所でも行われていますが、いつも賛否両論半々ぐらいの割合です。一方、コミック漫画やアダルトビデオなどは女性を性の道具として扱ったり、性交と妊娠とは関係のないよう

な扱いであったり、子どもたちに正しい情報が伝わるような表現は、まったくといってよいほどないのです。このような情報があふれている中で生活している子どもたちに、正しい知識を与えることはほんとうに必要なのでしょうか。

大人たちがもっと真剣に考える時期だと考えます。私は、講演の中で性交について話すことにしています。初めはざわめき、うつむき、目をそらしていた子どもたちが、だんだん真剣な表情に変わっていきます。従来、性交は種族保存のみが強調されて扱われてきましたが、最近は連帯性や快楽的側面からも扱われるようになっていきます。私自身は、助産婦の立場からどうしても生殖の側面を強調してしまっていますが、性交体験の低年齢化、中学生の男女交際のあり方に対する意識をみると、もう寝た子を起こすなという消極的な姿勢では、問題は解決しないと思います。

昭和60年、某病院において、19歳未満で出産した19名について調査した結果、今回の出産以前に人工妊娠中絶の経験のあるものが7名(36.8%)いました。人工妊娠中絶や出産により将来設計を中断せざるをえなくなった事例もあります。性教

育ではなく、生命教育こそが必要であると発言した作家がいましたが、私は性教育と生命教育は別なものとは考えられません。生命を大切にすることこそが性教育だと考えるからです。年々増加している10代の妊娠、そして人工妊娠中絶の実態をみると、避妊教育もまた避けて通れないことだと思います。

私は、中・高校生たちの性交を肯定するものではありません。避妊教育は人間の一生にとってきわめて大切なことであるという認識の上に立って、単に避妊という方法論だけでなく、人間教育を基盤とした展開を心がけています。しかし、短い時間でしかも、人間関係が成立していない中での特別講演という型では、なかなか難しいことを痛感しています。

中学生に対する指導内容は表2に示しました。中学校で話す機会はきわめて少なく、年2回程度であることから内容の検討までには至っていません。感想文や相談が寄せられれば別ですが、フォローができないのが現状です。そのために、疑問や個人的な相談等を受けるために、必ず自宅の電話番号を知らせています。

表2 中学生に対する指導内容

時間:50~60分		対象:中学2年生男女
内 容	留 意 点	教 材
性とは何か 生命の誕生	いのち、性交 生命誕生の仕組みと自分の誕生を考える	ベビー模型 男の子、女の子
思春期の体の変化 ホルモン 男子の体の変化 女子の体の変化	なぜ、体の変化が起こるのか、体の仕組みと 第二次性徴、体の成長には個人差があること と、成長の途中にあることを強調する	
思春期の心の変化 男子の心の変化 女子の心の変化	心の変化の特徴 男女の心の変化の特徴	
男女交際のあり方 将来のある若者が、どのような男女のつきあ い方をするのが望ましいか	男女交際のあり方 身近な例を挙げて話す	
避妊について	受胎調節とは 人工妊娠中絶	模型(受胎調節避 妊具一式)

内容は、時間によって多少変更します。

3. 高校生に対する指導内容

高校では、中学で性教育を受けたことのない生徒が多いことから、中学での指導内容とほとんど重複しています。この時期の子どもたちの悩みは、男女共に性器の形や大きさが第1位を占めます。

男子の性器の悩みは一般に報告されているように、ペニスの長さや大きさが1位であり、次いで包茎です。これまで男子の性器に対する悩みについては相談を受けてきましたが、最近は女子からの相談が多くみられます。

最も多いのは、外陰部の形、特に小陰唇の大きさや形・色などです。学校では第二性徴について、一般的なことは聞いているが具体的な話は聞いていないそうです。写真があれば送ってほしいと希望する生徒もあります。小陰唇の大きさ・形・色などについては、できるだけ具体的に話しています。次いで多いのは、月経に対する心配や不安です。月経周期が正常であるにもかかわらず、異常であると思っている者が半数を占めます。月経の手当てについては、小学生の時すでに教わっているが、月経や排卵のメカニズムや思春期の特徴に

ついては、あまり具体的に聞いていないという者が多く、助産婦の立場から具体的に話す必要性を感じます。

男女交際については、高校生は中学生よりいっそう異性に興味をもつ時期であり、好きだから、愛しているからキスや性交渉をもちたい、などの悩みを訴えてきます。なかには、大人の私には「危ない」と叫んでしまいそうな相談の手紙もあります。このように相談内容をみると、男子と女子の性行動の違いなども強調する必要性を感じます。

某高等学校において、男子103名、女子81名を対象にした結果を見ると、排卵や月経周期についての正解率は女子32%、男子40.9%で、男子のほうが正解率が高く、自分の身体に起こる変化を女子は当然知っているものと思っていましたが、男子よりも正解率が低いのは意外でした。また、もし妊娠したら（させたら）どうするかについては、男女差はなく、80%が人工妊娠中絶をすると答えていました。学業中の高校生であるから当然といえば当然ですが、少し驚きました。避妊法については、知っている者、男子74%、女子52.1%であ

表3 高校生に対する指導内容

時間：90分 対象：高校1・2年生男女		
内 容	留 意 点	教 材
性とは	いのち、性交	
思春期の体の変化 ホルモンの変化 男子の体や心の変化 女子の体や心の変化 性器の変化 マスターベーション		
男女の性行動の違い		
男女交際のあり方	性非行や性被害者の加害者や被害者にならないように	
避妊について		模型 避妊具一式
月経時の手当て	ナプキン、タンポンの使い方に対する注意	
基礎体温の測り方、月経記録のつけ方		基礎体温計 基礎体温表

内容は、時間によって多少変更します。

り、情報源は雑誌、友人がほとんどでした。これらの結果からみても、高校における避妊教育は必要だと思います。正しい知識をもたせることは、長い将来にわたって非常に大切なことだと考えます。

避妊教育のあとの男子学生の感想を紹介しますと、「僕は、セックスについて自分自身で責任を負えるようになるまで我慢しようと思う。女の人にとってセックスはとても大切なことなので、男の勝手な欲望のために女の一生をだめにするようなことのないように心がけたい」、女子学生は「コンドームは100%の避妊法ではないと聞いたとき、あれがいちばん大丈夫だと思っていたので驚いた」と書いています。

人工妊娠中絶の危険性を話す場合、あまり違和感や恐怖感をもたせる話をしてはならないことを体験しました。中絶時に使う器械を持参して説明している途中、3人の生徒が真っ青になって退場してしまいました。決して脅しのつもりではなかったのですが、結果的には恐怖感をもたせることになりました。このような話をするときは、慎重でなければならないことを学びました。女子学生には、健康教育として基礎体温の測り方、月経記録のつけ方も指導しておく必要があり、生徒たちは測ってみたいと興味をもつ者が多くみられます。試行錯誤で進めている性教育ではありますが、実際に生徒たちと触れ合うことで問題も見え、また勉強不足を感じます。高校生に対する指導内容は表3に示しました。

4. 中高年に対する指導内容

わが国では、長い間中高年の性に対する話はタブー視されてきました。家庭教育学級で少し中高年の性に触れたことで、急に講演依頼が増えました。とはいえ、初めから性の話を切り出すことは私自身抵抗があり、次のような順序で話を進めています。

1. 中高年とは
2. 更年期障害
3. 婦人科関連の病気
4. 男性に起こりやすい病気
5. 中高年の栄養
6. 中高年の性

中高年の性の問題は、女性では、性欲はあるが

膣が痛いので応じたくない、性欲はあるがこの年になって自分の口からはいえない、など古き時代を生きてきた女性の本音を聞くことができました。男性では、妻が応じてくれない、寂しい、できればセックスフレンドがほしい、等がおもなものでした。深刻な性の悩みをもって県外から訪れる人もありますが、ほとんどが若い時代からの夫婦関係の貧しさに起因することが多いようです。一般的に知られていないリュブゼリー等も紹介しますが、効果についてはまだ把握してはいません。

これからは、カウンセラーとしての役割も求められているように思います。老婦人にとっては、かつて自分たちの身近にいた助産婦（産婆）という存在は身近に感じられたのかも知れません。相談する人が産婆さんでよかったといわれたとき、もっと助産婦をPRしなければならないと痛感しました。

5. 父母に対しての指導内容

父母に対しての指導内容は下記のとおりです。内容については、紙面の都合で割愛しますが、ここは最も助産婦としての経験が生々と語れるところだと思います。個人個人がいろいろな味つけをして、その人らしさで展開できるのではないのでしょうか。

父母に対しての指導内容

1. 性教育とは「どんな」教育でしょうか。
性教育とは人間教育であり、その基本は「いのち」を学ぶことである。
 - ・すべての子どもは、望まれて生まれなければならない。
 - ・性の差別をしていませんか。
2. 性教育は「いつ」から始めたらよいのでしょうか。
 - ・性教育は、母親の胎内から始まっています。
 - ・性教育は、両親の生活の反映です（人間性を豊かにする女性観、男性観）。
 - ・子どもは寂しいのです。温かい家庭を求めています。
3. 性教育は「どこで」するのでしょうか。
家庭、学校、社会の責任です。
 - ・家庭における性教育

- ・社会における性教育
 - ・学校における性教育
4. 性教育は「だれが」教えたらいいのでしょうか。
 5. 性教育は「何を」教えたらいいのでしょうか。
 6. 性教育は「どのように」行ったらよいのでしょうか。

III 現状の反省とこれからの性教育

試行錯誤で進めてきた15年間の実践報告をいたしました。が、どのようなカリキュラムがいいのか、何が必要なのか、教材は何を使えば効果的なのか、まだまだ課題があります。

これからの性教育は、(1)小児期、思春期をいかに過ごすかが、その人の一生に大きな影響を及ぼすことを考えると、人としての生き方を基盤として性教育が必要であると考えます。(2)性に関す

る相談の窓口が少なく、またどこにどのような場所があるのか、どんな人がいるのか、把握できない現状です。そして思春期に関する相談窓口の場所をつくる必要があると考えます。(3)相談者の育成。(4)助産婦の専門性を生かした研鑽の必要性などが急務であると考えます。

私たちの先輩や同僚が地域に根ざした性教育活動を実践されていますが、これからは個人の経験としてだけでなく、チームで対応するネットワークづくりをすることが必要だと思います。助産婦は、助産婦業務の拡大や進展についての提言をするだけでなく、専門性を生かした独自性をもった性教育を実践することが、いま求められていると思います。

座長の労をおとりいただいた次期会長の藤田八千代先生に心からお礼申し上げます。ご静聴ありがとうございました。